

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：54601
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24520693
 研究課題名(和文) 学習者の Predictability を育む英文読解 Web 教材開発

 研究課題名(英文) Development of reading material in English on the web

 研究代表者
 金澤 直志 (Kanazawa, Naoshi)

 奈良工業高等専門学校・その他部局等・教授

 研究者番号：20311061
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の目的は、学習者の英語による読解能力の向上を目的としている。学習者が、実証前、実証後試験としてTOEICを年2回受験し、そのテスト結果を見ても、この研究が成功だったことを実証している。「日本人学習者の文章の読み方、話の聞き方が受動的であり、自分の問題意識が伴っていない」ことが問題であると考え、次のInputを積極的に予想することにより、受動的になりがちな学習者のInputへの意識を高める教材を開発できた。学習者は「次に何が書いているのだろうか？次に相手が何を言うのだろうか？」というように、「次に与えられるInput」に積極的にかかわろうとする自学自習web教材を開発した。

研究成果の概要(英文)：The end of this project is to improve English-reading ability of Japanese learners. The TOEIC scores, which the learners took twice a year as the pretest and the posttest, actually show this project has been so successful. The problem was assumed that they had few awareness of the issue or involved problems, listening or reading in English. To solve this problem, the self-learning reading material on the website has been created to make their awareness to input raised. This gradually makes the learners positively focus on the output from others by themselves. Tangibly, this reading material makes their awareness proactive to predict the next input, step by step.

研究分野：英語教育学

キーワード：Predictable Input/Output 第二言語習得 応用言語学 CAI 自学学習web教材 TOEIC対策

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、**Nunan** 他が提唱する CLT(Communicative Language Teaching)が定着しつつあり学習者にとって実用的な英語運用能力を習得できる機会が増えている。しかしながら、学習者の態度は積極的とは言えず、さらに経済界は「英語が使える日本人」の育成を高等教育機関に求めている。その理由のひとつに、「欧米人学習者に比べて、日本人学習者のものの観方および考え方(文章の読み方、話の聞き方)が受動的である」のが問題ではないかと考えた。ここで言う受動的とは、「英文を読み、英語を聞く際に、自分の問題意識が伴っていない」ということである。

2. 研究の目的

Predictable Input/Output を応用し、学習者の英語による Reading 能力の向上を目的とした。その過程において、副次的ではあるが、学習者の英語 Listening 能力、ひいては、Speaking 能力の向上も考えられた。

「学習者が問題意識を持って英文を読み、英語を聞く」という、学習者の学習態度、すなわち「学習者の Input への意識改革」が必要であった。研究代表者金澤が 2000 年以来、その実践と効果を研究している **Predictable Input/Output** を応用し、自学自習教材を web 上に作成することで、この問題が解決できると考えた。**Predictable Input/Output** とは、次の Input を積極的に予想する、つまり相手の次の Output への意識を高めることにより、受動的になりがちな学習者の Input への意識を高めるものである。「次に何が書いているのだろうか？次に相手が何を言うのだろうか？」と学習者が次に与えられる Input に積極的にかかわろうとすることで、受動的になりがちな Input を積極的に受け取ることを可能にする従来にないアイデアである。

アメリカでは児童の発達段階に合わせた教育教材として広く利用されている Predictable Books を用いた言語習得に関する研究を行ってきた。語学教材の多くは言葉の 4 技能を向上されるのが目的であり、「読むこと」に限定された Predictable Books の有効性は、体験的なものにとどまっていた。研究代表者・金澤は、この研究に注目、可能性を見出した。**Krashen** の“**Input Hypothesis**”を応用し、“Comprehensible Input”は、受け取り手のことを思いやった“Predictable Output”でなければコミュニケーションは成立しないと考えた。このように Input「読むこと・聞くこと」を Output「書くこと・話すこと」に拡張すれば、**Predictable Input/Output** の構想を実現できると考えた。その実現には学習者の Input への意識改革が必要であり、Meta-cognitive な訓練に関しても、英語を習得する過程で訓練するため、この **Predictable Input/Output** に基づく、日本人用英語教育プログラムをコンピュータのオンライン上で開発しようというのが、この研

究経緯であった。

3. 研究の方法

「語感 (“Predictable Input/Output”) を応用した英語教育プログラム」での「語感」とは、一般的な主観によるものではなく、単語レベルでは「適切な品詞や派生語を使用できる客観的な感覚」であり、文法レベルでは「主要な語(主語・述語・目的語や補語)とそれ以外の語を区別できる客観的な感覚」を指している。このような「語感」を養成することで、あまり単語力や文法力が無くても TOEIC の問題が解けることを学生に体得させることができる。これにより、「自分でも TOEIC 問題が解ける」という自信を持ち TOEIC への動機付けを行う。

現在、書店に並ぶ TOEIC 対策の参考書は、英語の「受験勉強」の延長線上でしかなく、英語利用者の視点から作られた解説書はほとんどない。「語感 (“Predictable Input/Output”) を応用した英語教育プログラム」では、英語利用者が、文法やリーディングで何を重視しているのかを解説することで、彼らが文章を作成するとき彼らの思考が、文法レベルで、文章の構成レベルで、理解できる画期的な解説がなされる。

文法問題などでは、約 20 秒で 1 問解かなければならない。そこで、授業では語感を利用し、いかに内容を把握せず、しかも単語がある程度わからなくても、「解が導きだせる」ということを体得させる。

一つ一つの問題に対して、繰り返し同じ形式の問題を尋ねるので、学生にとって次に何が尋ねられるかわかっていて、それが彼らの心理的な安心感となっている。これにより、授業での実践において英語が得意でない学生でも授業中の質問に積極的に手を挙げて答えようとする。学生は自分が答えるという緊張感を持ちながら、同じ段階で同じ形式の問題に答えるので、問題に対してある程度の安心感や自信を持って答えることができる。具体的に以下に例を用いて解説する。

“I () buy CDs at a store, because cheaper ones are available through the Internet.”
A) rare
B) rarest
C) rarity
D) rarely

第 1 段階: 「Modifiers」を取り除く

文の主な構成要素 (S「主語」・V「述語」・O「目的語」・C「補語」) だけにする。そこで、ジャマモノとなる 3 つの「Modifiers」を文から取り除く。1. 副詞、副詞句、副詞節、2. 名詞に直接つく形容詞、形容詞句、形容詞節、3. 前置詞から次の名詞まで (この項目は、本来、副詞句や形容詞句であるが、あえて「わかりやすいため」、別に挙げている) 以上のものを全て、文中から削除する。

第2段階：文中に使われている動詞を探し、それぞれ目的語をとるかどうかが確認し、述語を確認する

学生に動詞を意識させる訓練として非常に有効である。

第3段階：主語と述語を探し、文が完成しているか確認し、括弧に何が適切か考える

「文が完成している」とは、最低限、主語と述語があり、目的語を取るべき動詞が目的語を取っていること、述語が目的語をとる場合は、必ず目的語をとらなければ文が完成しているとはいえない。補語をとる場合は補語をとることで「文が完成している」と呼ぶ。この文「I () buy CDs.」は完成している。完成している文に何か加えなければならないので、先ほどの3つのModifiersから適切なものを選ぶ。この3つの中からは、副詞しか入らないことがわかり、副詞の接尾辞-lyがついているものを選ぶ。このように、内容を理解しなくても、語感を養うことで、自信を持って問題を解くことができる。

4. 研究成果

2012年度には、Predictable Input/Outputの概念を応用した「英文読解プリント」を使って、教室内で実践していた。このプログラムを受講した学生116名は、受講前に2011年4月にTOEIC-IPテストを受験しており、このプログラム受講後2012年4月にもTOEIC-IP試験を受験している。このプリントを利用した結果、TOEIC-IPテスト平均点が、66.0ポイント上昇した。

2013年度には、Predictable Input/Output「英文読解プリント」の問題数を充実させ、教室内で実践していた。このプログラムを受講した学生122名は、2012年4月にTOEIC-IPテストを受講前受験しており、2013年4月にも受講後受験している。このプリントを利用した結果、TOEIC-IPテスト平均点が、さらに72.4ポイント上昇した。

2014年度には、Predictable Input/Output「英文読解プリント」の内容を選別し、教室内で実践していた。このプログラムを受講した学生118名は、2013年4月にTOEIC-IPテストを受講前受験しており、2014年4月にも受講後受験している。このプリントを利用した結果、TOEIC-IPテスト平均点が、さらに76.1ポイント上昇した。授業でも、さらにPredictable Input/Outputを実践すべく、iPodによるクリッカーを開発することで、教室内で学生が一斉に速読し、iPod上で解答し、その結果を即座に教師が把握し、解説することができるシステムを開発できた。

2015年度には、Predictable Input/Outputの概念を応用し、英文読解をさらに高めるた

めに、速読と多読を同時に行えるWeb教材を開発するという、次の科学研究費補助金につなげることができた。2014年度に開発されたクリッカーの副産物として、小学校英語活動においても、このクリッカーシステムが活用できることを証明した。さらに、これまでの論文と学会発表により、IATED EduLearn2016のInternational Scientific Advisory Boardに選出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

① KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
FUKUCHI, Kayoko (福智 佳代子)
INSTRUMENTAL MOTIVATION IN ENGLISH ACTIVITIES AT A JAPANESE PUBLIC ELEMENTARY SCHOOL、ICERI2015 Proceedings、査読有、2015、1442-1447、
<https://library.iated.org/view/KANAZAWA2015INS>

② KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
Speaking through Reading in Class - The Way of ICT -, ICT for Language Learning 7th edition Proceedings、査読有、2014、449-455、
https://books.google.co.jp/books?id=PZdsBQAAQBAJ&printsec=frontcover&dq=editions:avek_xFuKH0C&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwiFvS27PTMAhWDHZQKHd5bCnMQ6AEIGzAA#v=onepage&q&f=false

③ KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
BETTER COMPUTER ASSISTED INSTRUCTION IN CLASS WITH QUANTITY AND QUALITY、ICERI2013 Proceedings、査読有、2013、7080-7087、
<https://library.iated.org/view/KANAZAWA2013BET>

④ KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
Strong Motivation to Learn English in Japan with TOEIC and CAI、ICT for Language Learning 5th edition Proceedings、査読有、2012、416-420、
http://conference.pixel-online.net/ICT4L2012/common/download/Paper_pdf/416-SLA55-FP-Kanazawa-ICT2012.pdf

[学会発表](計4件)

KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
FUKUCHI, Kayoko (福智 佳代子)
INSTRUMENTAL MOTIVATION IN

ENGLISH ACTIVITIES AT A
JAPANESE PUBLIC ELEMENTARY
SCHOOL、 ICERI2015、 査読有、 2015
年 11 月 16 日、 Barcelo Renacimiento,
Seville, Spain にて

② KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
Speaking through Reading in Class -
The Way of ICT -, ICT for Language
Learning 2014、 査読有、 2014 年 11 月 13
日、 Hotel Mediterraneo, Florence, Italy
にて

③ KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
BETTER COMPUTER ASSISTED
INSTRUCTION IN CLASS WITH
QUANTITY AND QUALITY、
ICERI2013、 査読有、 2013 年 11 月 19 日、
Barcelo Renacimiento, Seville, Spain に
て

④ KANAZAWA, Naoshi (金澤 直志)、
Strong Motivation to Learn English in
Japan with TOEIC and CAI、 ICT for
Language Learning 2012、 査読有、 2012
年 11 月 16 日、 Hotel Mediterraneo,
Florence, Italy にて

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等は、上記に記しております。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金澤 直志 (KANAZAWA, Naoshi)
奈良工業高等専門学校・一般教科英語・
教授
研究者番号：20311061